

欧州金融不安を機に市場全体にリスク回避姿勢が強まる

2010年9月8日(水)

第一生命経済研究所 経済調査部
副主任エコノミスト 人見 小奈恵

TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

欧州金融不安が再燃し、欧米株は軒並み安

欧米市場では欧州の金融不安の再燃を受けて、投資家のリスク回避姿勢が強まりました。株や高金利通貨、銅などのリスク資産は軒並み安となる一方、主要先進国の国債は上昇し、商品市場では金先物が6月以来の高値を更新しました。為替市場ではユーロが大幅に下落したほか、豪財務相が資源税の早期法制化について言及したことなどから豪ドル等の資源国通貨も軟調でした。一方、円は主要通貨に対して上昇し、対ドルでは一時、83円51銭と15年3ヶ月ぶりの高値を更新しました。

欧州の金融不安が広がったきっかけは、米経済紙が欧州のストレステストについて「一部の銀行がソブリン債の保有を過小評価している」との記事でした。欧州で依然としてソブリンリスクが煽る中での報道に、欧州の金融システムに対する不安が一気に広がりました。さらにドイツ銀行協会が、バーゼルⅢの新規制下において、ドイツの10大銀行は最大1,050億ユーロの追加資本が必要になるとの見方を示したほか、ギリシャ銀行最大手による資本増強等、金融規制強化や増資観測が相次いだことも金融株の重しとなりました。欧州債券市場ではアイルランドやポルトガルの対独スプレッドは過去最高水準まで拡大しました。また、7月のドイツ鉱工業受注指数が、前月比でプラスとの予想(+0.5%)に反し、▲2.2%と09年2月以来の大幅な低下となったことも市場心理を冷やしました。

世界的なリスク回避の流れを受けて、国内市場も株安・円高

寄り前に発表された7月の機械受注(船舶・電力除く機械受注)は前月比+8.8%と予想(+2.0%)を大幅に上回り、2ヶ月連続で増加しました。内訳を見ると、製造業は+10.1%と2ヶ月連続で増加したほか、非製造業についても+8.1%と3ヶ月ぶりにプラスとなり、持ち直しの兆しが窺えました。景気回復ペースの鈍化懸念や円高の進行等、先行き不透明感が強いものの、企業の設備投資は緩やかながらも回復基調にあることが示唆されました。

国内株式相場は欧米株安を受けて大幅安で始まりしました。全セクターがマイナスで、主力の大型株が弱く相場を押し下げました。特に軟調だったのが金融関連株や輸出関連株でした。欧米市場で金融システム不安から金融株が軒並み売られたほか、円高が進行したことも嫌気されました。株価指数先物には断続的に売りが出たほか、現物市場でも景気敏感株中心に下げ幅を広げ、寄り付き後は下落基調となりました。円高の流れは止まらず、為替市場ではドル円がストップロス巻き込んで下げが加速しましたが、そのことも市場心理を一段と冷やしました。日経平均株価は後場に入り、一時9,000円を割り込みましたが、その水準では押し目買いが入り、その後は下げ止まりました。しかし、軟調な地合は引けまで続き、結局、日経平均株価は▲201円安の9,024円と2日続落して引けました。アジア株も金融や資源関連株中心に総じて弱く、マーケット全体がリスク回避姿勢一色の様相でした。

以上